

『中学校』一九五六年七月八月（全日本中学校校長会）

太陽族映画の 教えるもの



矢口 新

はしがき

太陽族映画の問題も、もうそろそろ下火になりかけているのではないか。新聞も余りさわがなくなったようである。冷却期間を置いてゆっくり考える方が、ものの本質もわかるし本格的な対策も立てられるし、これから、いろいろと考えてみるかと思っている。この問題はなかなか根の深い問題であり、巾の広い問題であって、世間の論議のように、簡単には解決しそうでない問題だと思う。つまり、世間の論議は、おさまってしまったとしても、教育者の問題は、これからはじまるというところであろう。

—

太陽族映画はよくない映画だろうか。これはなかなかむづかしい問題である。世の論者には見せた方がいい、ああいうものに毒されない精神をつくるのが大切だという人もいる。つまり悪いものに対して強い抵抗力をつくらうという教育的意味をもたせているのである。そ

ういう教育も大切な教育であるということは認めなければならぬ。実際に人間が、この社会に生活して行くことが出来るためには、悪に抵抗しなくてはならぬのであって、それには悪に打ち勝つ、悪以上のものをもつ必要がある。それは悪を知っていて、悪を克服するということである。

底ぬけの善人で、善の要素しかない人間だとしたら、この世に生活出来ないであろう。このことは、今の社会に生活している程の人は誰も知っている。教育していく場合も、適当に悪にふれさせて、それを克服して行くことをしなくてはならぬのである。否、教育が悪にふれさせなくても実際にはそれにふれている。教育はそのことを前提として、具体的にそれに打ち克つ力を与えようとしている。少くともそうしなくては、本当の教育にならない。

もし絶対的な意味でよい環境しか与えられないという人が居たら、その人間は現実の生活には役立たない人間であろう。意図的な教育をする場合に悪にふれさせることをやらないのは、社会に悪の環境があつて、それにふれているからである。意図的な教育はそれに対して打ち克つことを教えているから、そういうものに抵抗しつつ生活する人間をつくるのに役立つのである。これは或る意味で悪の効用ということである。

太陽族映画は悪の効用として、意味がないわけではない。見てこれを批判して行くことが出来れば役にも立つ。それがどの程度立派に役立つかはまた別問題であるが、全然無用ではないといえよう。

私自身も見ただけでも、本当はつまらない映画だと思つた。一つもリアルな所がなく、穴だらけの下らぬ作品である。幼稚なものが、しかし、それに自分の想像も交えて、今の若い人の気持のこういう点を問題にしたものだなど理解すれば、そういう気持も若い人にあるであ

ろう。そういうことは考えてやらなくてはならぬということも改めて思ってみた。それだけの役には立つ映画であった。世にあるものはこちらの考え方次第で無駄なものはないのである。

こういうものがつくられないようにしろという意見もあるが、私はやはりつくられたほうがよいと思う。これは駄作だが、こういうものの中に、われわれの問題にしてよい若い人の問題がかすかにでもふくまれている。そういう芽をつぶしてしまうことはよくないことである。よい芸術はどこから、何時何が出てくるかわからないのである。自由に創り出せるようにしておく所に、そういうものが生れる可能性があるのだから、こういうものをつくるなど一概に言っではいけないと思う。この二、三本の駄作のことはやめるといつてもよい。こんなものは下らないからよいが、これから以後出るものについて、あまり規制を加えてはならないと思う。というのは、太陽族を扱った映画はつくってはいけないという言い方は、それを真の問題として立派に取扱い、すぐれた作品を生み出させる芽をもつんでしまうことになるからである。

二

以上考えたことは、しかしこの作品を見るものが大人であることを前提としているのである。所が映画を見る人種というのは八割迄が二十五才以下の青少年といってよい。これはかなり確実な推計である。大人というのは映画をみない人種なのである。この点からみると、映画はすべて青少年のためのものという前提をおいてものを考えた方がよいのである。普通は二十才以下を未成年というけれども、いろいろな点を考え、またとくに精神の形成という点から考えれば、二十五才位まではまだ未成年の中に入れた方がよいのである。そういう点

から考えて、これまで映倫が青少年向き、成人向きなどと映画を区別しているが、その成人向きの映画をみている人種も実は、文字通りの成人ではなく、二十五才以下の精神上の未成人者が見ているのである。だから成人にしか見せられないなどといっているが、その場合の成人を映倫の人たちは二十五才以下の成人だというようにはつきり考えているだろうか。いつの間にやら成人というのを言葉通り、三十、四十になった良識のある成人というように考えてしまっているのではないか。そうだとしたらこれは全くの茶番劇である。そんな成人は映画なんか見ていやしいのである。

それはともかく、現実に映画を見るのは、未成人であり、映画は未成人のためのものだということまで考えをすすめることはならぬということである。

私は二十五才以下の青少年が、太陽族映画をみて、これを正当に評価し、駄作であるということがわかるだろうかということを考えてみた。またこれらの作品の中にあるモチーフが何であり、それがどういう社会的意識をもったものかということについて若い人々―未成年でなく、二十才以上の人でいわば精神上的未成人とも言うべき人々と話し合ってみた。それはケナミのよい人々には充分正当に受けとられてるように見えた。しかしケナミの悪い人種には必ずしも正当には受けとられていないようであった。未成人ばかりでなく成人でもあやしげな理解、鑑賞しか示さないのが随分いた。そして、それらの人々にはよほど指導をして見せなければ、これを作品として正しく鑑賞することが出来ないのではないかという気がした。

ここに問題がある。こういう映画は、ケナミのよい人種、とくに未成人を問題にしているのであるが、それらの人々はあまり見ないのである。そしてケナミの悪い、ミーチャンハーチャンが喜んで見るので

ある。そしてその数が相当に多いということは、新聞でこの映画が大変な入りをとったことから推測出来るであろう。

そうすると、あやしげな理解と鑑賞をしか出来ないケナミの悪いのがかなり多く見ていて、もちろんその見方も指導されていないとなるとこれは大人、良識ある大人、社会の健全な発展を考える大人にとつては何か考えなければならぬ問題があるようである。

ここで真先に出て来るのは、観覧の禁止とか、製作中止とかいうことであろう。製作中止ということは前に述べたような事情でなかなかむつかしいとなると、観覧の禁止という線が浮び上つて来るのである。誠にものとも至極な話である。せめて十八才未満、十六才未満は禁止せよなどというのもこういう線である。十六才以下はケナミのよしあしにかかわらずまだ早い。つまり赤ん坊に、こわいめしを食べさせるようなものだということである。

だが禁止は教育ではないということだけは確かである。素人ならそれで安心だろうが、教育者は、それで安心する程甘くはない。とくに新教育の基本的な考え方の洗礼を受けた教育者は、もはやそんな手で青少年の健全な成長がはかられるとは毫も考えていない。つまり青少年が、自覚的に、正しい考え方をもって行くように、自立的な教育方法は無いだろうかと考えるであろう。そういうことが考えられる場合それをあまりに強く妨害するものがあれば、それは大人の手で除いてやることもよいと考えるであろう。つまり積極的な教育活動があることが主であつて、それに附随してのみ、禁止ということも最少限の程度で考えられるということである。

三

観覧禁止ということは、言うは易くなかなかむつかしいことである。

かりに法律が出来て、罰則が出来るということになれば、法にふれることは恐ろしいことだから皆やらないうことになるかも知れないとも考えられる。けれども、あつてもなきが如き法もあるから、そういう状態になる恐れもある。というのは、取締るといふことが非常にむつかしいことである。まさか映画館の中に警察席を設けて、観覧者の一人一人を懐中電灯で照して、未成年かどうか、身分証明書を出させてしらべるわけにも行くまい。とすると、法があるというだけで施行は出来ないという話だということがわかつてくれば、一、二年の中にはやがて、ないと同じになることも考えられる。そういう法なら最初からない方がよいのである。

悪い映画を見せないようにするなどということは、法律の問題でなく、教育の問題である筈だ。映画に限らず環境の悪いのから子供を守るのには根本的には、大人の意欲と努力の問題である。そういう意欲と努力が続けられる所から、悪に對抗する心が子供の中にも生れて来るのであつて、大人と子供のダイナミックな緊張関係がなくてはならない。

家庭でも注意する。しかもたえずし続ける。職場の指導者も注意する。それを続ける。学校の先生も注意しつづける。こうして、学生も生徒も、働く青少年も育つて行くのである。ということは、ただ悪いものを見せないようにするというだけではなく、よいものを見せる努力をし続けるということでもある。大人がみんな、真剣になつて、そういう努力をして行くこと、そこに、子供も、若い者も育つて行くのである。家庭は家庭なりに、社会は社会なりに学校は学校なりに若い者を育てようとする意欲が子供を育てるのである。

こういうように考えると、われわれ大人の努力はこれまで十分であつたとは言えない。いろいろな方面で青少年を育てるといふことにつ

いて、甘い考え方しか持っていないのではないか。映画をつくる人が、青少年を育てるか育てないかという仕事に関係しているという意識を強くもってやっているだろうか。どうも怪しいような気がする。配給も興行もそういう点は甘いようである。もとより資本主義社会の商売ということは無視しろというのでない。けれどもそこには限度がありそうなものだという気がする。「もうかるぞ、それっ！」とだけしか考えないで、外の事は忘れているということはないだろうか。

これを受け取る側にも問題はあつた。悪い映画は追放しろというが、そういう人が案外どういふ映画がどういふように見られているか全然知っていないのである。見たこともない人が多いのである。そういうケナミのよい人でない、悪いといわれる映画を喜ぶ多くの青少年がいるのである。何百万といふのである。中学校の先生たちは、下らない映画をうれしがって見ているあの多くの青少年は、皆自分が育てた青少年だといふ思いで映画館へ行ったことがあるだろうか。時には見て、自分の教育を考え直してみるとよいのである。

下らぬ映画をげらげらと見たり、目をかがやかして見ている青少年は、映画を禁止したからといってそれで下らぬものを下らぬと見ることが出来るようになったわけでない。映画が見られなければ、他の所でまたそれとおなじものをさがすだろう。

根本は、教育という問題に帰着することは言うまでもないことだが、しかし実際に教育がそれ程強力ではないこと、教育にすべての責任を帰することは酷であることは何人も認めなければならない。教育に対する社会のマイナスの力も強いことを認めるからである。社会の大人という大人がすべて子供の教育を考える人ばかりでなく、現にマイナスの方に働いていることを認めなくてはならぬ。そうすれば、大人同志の間でまずたたかいは行われなければならぬのである。大人の中の

善なる意志がつよく、悪に対して働くことは大人の社会をよくすることであるが、そういうことが弱ければ、それが結局青少年を犠牲にするのである。

今の日本の社会においては青少年に、よいものを見せようとする大人の努力が足りないのではないかとということが強く感ぜられる。そういうたたかひがないのではないかと気がする。

四

もししっかりした委員会か何か出来て、優れた映画を推薦し、これが無税で見られるということになったらどうだろう。見る青少年も親も大喜びであるにちがいない。こういう映画には学校も各種の団体も協力して若し者を動員して見せることに努力することになったらどうだろう。興行者も喜ぶであろうし、製作も配給も、喜ぶにちがいない。そうすればよいものをつくれればもうかることにもなるのだから、よいものも出来るだろうし、配給も興行も大いに積極的になるだろう。

そういう方向へみんなが真剣に努力する心がないようである。政府としても青少年を育てるために優れた映画を無税にするぐらい当り前ではないだろうか。いくらでもないことなのだから、そういう事さえ出来ないで、七めんどくさい官僚式の理屈をふり廻して、結局は雀の涙のような金でも税金としてまきあげようとする考え方そのものに、何か危険なものがありはしないか。いいことだ、少しの損はがまんしてやろうという意気込みが、いい社会を育てるのである。大人が、そんな気持ちをもっとも持たないで、金がない一点ばりであるという所に、太陽族以上に危険な思想があるのである。

そういえば、太陽族映画の中の与太者が、やりたいことをやるといって、人間性も何も無視した行動をし、矛盾だらけの生活をしている

姿は、大人の生活の様子とよく似ていてはいないか。大人も、此の頃の指導者たちの様子を見てみると、無茶苦茶な理屈をふり廻して、自分勝手な行動をしている所は、全く太陽族ではないか。いやそれよりもっと悪いかも知れない。そういうことが若い者に希望を失わせ、極端に走らせているのである。

太陽族が性の問題について破壊的であるというかも知れないが、大人がそもそも人間を無視した考え方を強く堅持しているではないか。殆んどすべての大人が、娘を売り物、買い物あつかいにし、形式的に、娘を男の所へ片づけ、娘をどこからかもらって来て、結合させる。そういうために、娘をきずものにしないうで置くという考え方をしているのではないか。そこから真に人を愛するということを若い人に禁止してしまっているではないか。

こういう思想はただ男女の愛に限らないのである。人間愛ということについて、そもそも根本的なセンスが欠けているのである。そうしてすべてが恰好だけで処理されている。中味は、がりがりの唯物思想である。ヒューマニズムは薬にしたくもない。これが世の中の実情ではないか。そうしてその大人が自分だけしたいことをして、人にはやらせないというのはおかしい。

その中で育っている青少年が、そういうものを端的に表して来ても不思議でない。特に多くの普通の青少年が、そういう悪どいものを描いた太陽族映画を喜んで見るのも当り前であろう。新聞の政治面や社会面を見る位の気持であろう。大人は考えなければならぬ。

(筆者＝国立教育研究所員)